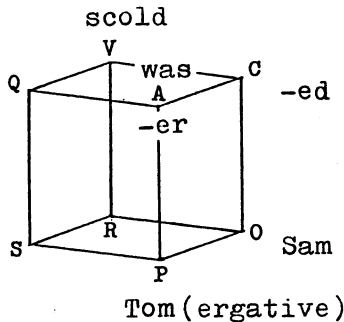


非能動者主語の位相論

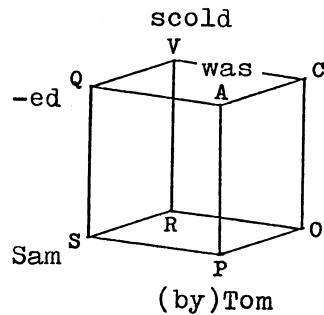
田 原 薫

位相論的統語観 (topological view of syntax) では、他動詞文の能動態と受動態は共通の統意構造から派生される。その統意構造は、能動者がまだ動詞の項となっていない点で受動態に近い。これを Amphidiathesis (両動態) と呼ぶ。第1図は、叱責という事態がサムを受動者・トムを能動者として起ったことを意味する両動態統意構造である。

第1図



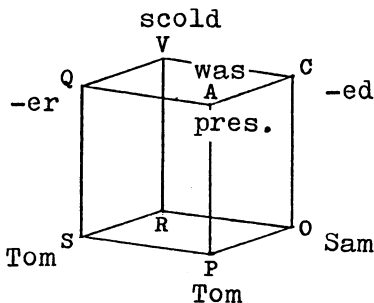
第2図



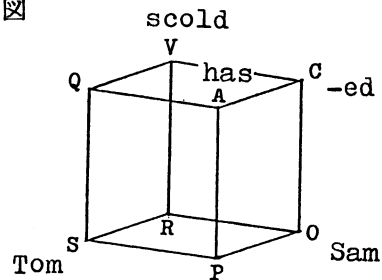
第1図から受動者nexus (Sam—-ed)のS—Qへの転送と、付随的な若干の変化を経て第2図の受動文の統語構造ができる。

第1図から能動文を派生する過程で能動者nexus (Tom—-er)がS—Qへ転送されるが、その結果空いたP—Aに、結果に対する責任者nexus (Tom—pres.)が嵌まり込むと、第3図の構造となる。これは過去と現在を重層的に叙述する構造であり、能動者主語構文と非能動者主語構文との混成構造でもある。ここから若干の変化を経て、現在完了構文の第4図が派生される。

第3図

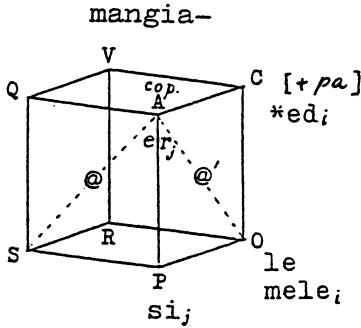


第4図



両動態統意構造はまた、再帰受動構文にも基礎を与えている。たとえば次の図式によってイタリア語の再帰受動文 *le mele si mangiano*. およびその完了形態 (…… *si sono mangiate*.) などが説明される。すなわち、呼応の中核@と@' の二者択一に *er* と **ed* の交互点滅が絡みあって、現実の諸形態が生成される。

第5図



ただし, *cop.* = 繫辞
 [+pa] = 過去の意味素性
 添え字は *nexus* 関係を示す。

図で、Sに無音形の抽象的主語（三人称単数と見なされる）があると仮定すると、@が機能し、*si mangia le mele.* の形が生成される。そうでない場合は@' が機能するが、その際Aの *er;* (*si;* と *nexus*をなす) が働けば能動型の *si mangiano le mele.* 或いは *le mele si mangiano.* が得られ、逆にCの **ed* が働けば *le mele si sono mangiate.* という、一見受動型の完了形式の文が得られる。